

# 歴史を歩く 31

## 『戦国時代の群像』

### 第十六話 肝付家の落日



島津氏と肝付氏という両雄の狭間で波乱の生涯を送った女性がいた。肝付兼統の妻阿南（御南）である。永正8年（1511年）に伊作家第10代当主 島津忠良の長女として伊作城で生まれた。次女の島津御隅も同年に出生しているところから、双子であったことが推測される。肝付兼統も同じ年、第15代当主 肝付兼興の長男として生まれた。

夫兼統は、鎌倉時代以降の肝付氏における最大の勢力を築き上げた武将である。そして阿南の父 島津忠良、弟 島津貴久は島津宗家第11代当主 島津忠昌の自殺以来、衰退していた島津氏を回復させ、発展の基礎を作り出した「島津家中興の祖」である。これらの英雄が16世紀代の薩摩と大隅に出現したのは、歴史のいたずらであろうか？

阿南は肝付氏と島津氏との

友好関係を結ぶために島津氏から肝付氏に嫁いだ。いわゆる「政略結婚」である。大永6〜7年（1526〜1527年）の、兼統、阿南ともに17歳の時のことである。同じように島津貴久の正室として肝付兼統の妹が迎えられているが、兼統の妹は結婚後に程無くして20歳の若さで早世した。阿南は一人肝付氏と島津氏の関係を友好に導くために尽くさなければならなかった。

阿南の結婚後、しばらくは肝付と島津との関係は良好に保たれていた。島津忠良、貴久は宗家家督を巡って薩摩半島における勢力拡大を図っていたし、肝付兼統もまた、大隅半島における領土拡大を狙っていた。薩摩・大隅それぞれにおいて勢力を広げながらも、互いに協力し合っている。大隅の覇権を巡って肝付氏と豊州島津氏・北郷氏との緊

迫状態が続く中にありながらも、天文22年（1553年）正月の、兼統と妻阿南は、加世田に島津忠良を訪れている。この年に兼統は家督を長男 良兼に譲っているの、義父への報告も兼ねての訪問であった可能性もある。しかし、豊州島津氏・北郷氏との緊迫状態が続く中にありながらも、10日以上も加世田に滞在しているところからすると、忠良と兼統の間には形式的ではない、人と人のつながりを見出すことができる。阿南にとっては幸せな時期であったかもしれない。

しかし、この友好関係は長くは続かなかった。島津忠良・貴久と肝付兼統との間に綻びが生じ始め、とうとう貴久と兼統との間で両氏決戦の火蓋が切られた。永禄9年（1566年）に肝付兼統が、そして永禄11年（1568年）に島津忠良、元龜2年（1571年）に島津貴久が卒した。両氏のそれぞれの運命を次世代に託すかのようだった5年間の間に3人の英雄がこの世を去るといってもまた、劇的である。

肝付良兼は、第17代当主

にありながら、父兼統の影に隠れていたが、父の死後、義父伊東義祐との協力体制を強め、豊州島津氏を抑えて、積年の願いである大隅制覇を成し遂げた。その後も島津氏の攻撃を撃退するなど、父に勝るとも劣らない実力を持っていた。しかし、良兼は父の死後、わずか5年後の元龜2年（1571年）に急病で亡くなる。享年37才、まさにこれからの肝付家にとつて必要な時であった。

良兼の急死を受けて、阿南は早速家督相続を急がねばならなかった。良兼の世継ぎとなる満寿丸は早世しており、第18代当主は良兼の弟で、兼統の三男である肝付兼亮に委ねることになった。家督相続を円滑にするために、阿南は良兼の妻である高城と談合し、肝付良兼の次女を兼亮の妻にしている。この時兼亮は若干14歳であった。

兼亮は父・兄の意思を継ぎ、早速島津攻めを行う。元龜2年（1571年）の11月、兼亮は日向の伊東義祐、下大隅・垂水の伊地知重興、根占の榑寝重長の援助を得て、100隻以上の軍船を率いて

向島（桜島）の野尻を攻めた。しかし、横山城を拠点として島を守備していた島津家久と鎌田政近によって進撃を阻まれ、結局鹿児島湾の沿岸を、ただ荒らしまわって下大隅に帰っただけであった。

兼亮はさらに、翌年正月に岸良将監に海から国分を攻めさせ、さらに廻（霧島市福山）、市成（鹿屋市輝北）に潜む島津軍の撃退のため、肝付兼純に攻撃をさせた。しかし、岸良将監も肝付兼純も隊もろとも討ち死にし、これに乗じた島津軍は、瞬く間に垂水の牛根境から二川を占領した。

こうして、島津氏と肝付氏の最終決戦は始まった。とは言え、父・兄と違って実戦経験のほとんど無い兼亮が、義久をはじめとする島津四兄弟を相手に決戦を挑むのは無謀に等しかった。この後、肝付兼亮は島津氏と戦いを重ねるたびに、一気に求心力を失っていく。

こうした肝付家の衰退の中で、阿南は肝付家存続のための最後の策を講ずることになる。

（大崎町教育委員会

内村憲和）